

FD・SD News Letter

2020 No.1

教育研究推進センター長 ご挨拶

日頃より教育研究推進センターの活動にご理解・ご協力いただきありがとうございます。

今号より新たに「FD・SD ニュースレター」として発行することとなりました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、社会全体が大きな変化を強いられ、十分な準備も整わないままに、働き方、学び方が一変し、生き方さえもが大きく揺るがされた一年となりました。こうした社会情勢の中、文教大学の教育活動もまた例年とは全く異なるものとなり、春学期の授業はそのすべてがオンライン授業に切り替わり、秋学期にはオンラインと対面を併行する形での授業形態となりました。多くの授業がこれまで実施されてきたものとは異なる形態・方法で運営・実施され、授業に当たる多くの教員は、初めての授業形態に対して授業準備や各種対応に追われながらも、学生たちの学びを保証できるよう努めました。職員もまた、授業及び学生生活全般に関わっての学生対応や外部機関との連絡・連携などに尽力しました。とりわけ学生にとっては極めて残念な一年であったことが、授業アンケートに寄せられた切実なコメントからひしひしと伝わってきました。オンラインでは学びづらい授業や、学生と教員の双方がオンラインでの授業に不慣れなままに始まり学修成果を実感できなかった授業もあったでしょうし、学修状況に対するケアやフィードバックが不十分に感じられることもあったことでしょう。また、部活動も一切できずに大学生活の楽しみも得られず、アルバイトも思うようにできずに経済的に苦しい学生も多くいたことと思います。新入生に至っては、未だ大学生活を肌で実感することもできていないのが現状です。大学としては、学生から寄せられた意見に真摯に耳を傾け、今後の教育に生かすとともに可能な限り補填していけるよう



教育研究推進センター長 中島 滋

努力することが必要と考えます。新年度には、学修活動はもちろんのこと、大学生としての学生生活を大いに謳歌できることを祈るばかりです。

本学における教育活動並びに研究活動の推進を担う教育研究推進センターでは、今年度、オンライン授業に関するFD活動として、本学の情報システムmanaba上の情報交換コースでの授業公開を行い、授業に関する意見交換を行いました。また、春学期の授業アンケートとして、本学におけるオンライン授業全体に対するアンケートを実施し、オンラインでのFD・SD研修会にて、学生から寄せられた率直な意見について教職員で共有を図り、授業の運営方法や学生対応等における現状の課題を通して教職員各々が本学の教育と自身の授業を振り返る機会としました。

新型コロナウイルス感染症の影響により急遽全学的に取り組むこととなったオンライン授業ではありましたが、少なからず今後も継続しての実施が全国的にすべての大学で求められていくこととなります。今年度の経験を今後の教育に生かしていくことこそが、今やらねばならないことでありましょう。その取組の一端を本ニュースレターで紹介させていただきます。ご精読いただければ幸甚に存じます。

2020 年度 FD・SD 活動の取組

- オンライン授業に関する学生アンケート（授業対応特別委員会）
2020 年 6 月 12 日～6 月 15 日
- 科研費執行のための説明会
2020 年 7 月 17 日、7 月 20 日
- 2020 年度春学期「文教大学におけるオンライン授業」に関するアンケート
2020 年 8 月 11 日～8 月 28 日
- 「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」「2020 年オンライン授業に関する学生アンケート」
結果のフィードバック及び組織的な活用
2020 年 9 月～10 月
- 科研費申請のための説明会
2020 年 9 月 24 日
- 2020 年度 FD・SD 研修会
2020 年 10 月 14 日開催 Zoom を利用したオンライン開催
「特別な状況下での本学の授業及び教育活動について考える」
- 2020 年度学生生活調査・卒業時アンケート
2021 年 1 月 22 日～2 月 12 日
- 2020 年度秋学期「文教大学におけるオンライン授業」に関するアンケート
2021 年 2 月 6 日～2 月 22 日
- ハイフレックス授業に向けたオンライン教材の提供
2021 年 3 月 27 日～
 - (1) 授業準備のための初歩的な ICT 活用方法
 - (2) 公益社団法人私立大学情報教育協会主催 2020 年度 FD のための情報技術研究講習会 参加報告

学部における FD 活動

「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」の分析結果と、授業対応特別委員会が 2020 年 6 月に実施した「オンライン授業に関する学生アンケート」及び「2020 年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の結果をもとに、各学部で議論を行い、授業内容及び方法の改善に向け、組織的な取組を行いました。

教育学部

① 2019 年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果

今回の FD では、メインとして「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート結果の分析について」を使

用し、さらに補助資料として「2020 年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」、授業対応特別委員会の 2020 年 6 月「オンライン授業に関する学生アンケート」を使用した。

「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート結果の分析について」からは、教育学部は、「全体としてこの授業を受けてよかったですか」という問いについては「そう思う」「ややそう思う」を含めると 9 割弱を占めており授業に対する満足度が高いこと、また、「この授業で次のものがどの程度得られましたか」という問いでは「知識・スキル」が高い評価を得ていることが分かった。一方、「シラバスにあるこの授業の到達目標を、あなたは十分に達成できたと思いますか」とい

う問いでは、「達成できた」「やや達成できた」を合わせると6割弱と高いものの、達成目標を把握していない学生が2割弱を占めており、シラバス・達成目標を周知する必要があることが明らかになった。

「2020年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」からは、教育学部は、履修を継続しなかった科目が0科目の学生が約83%と高い値であり、オンライン授業にも関わらず学生が真面目に授業に向き合ったことが分かる。一方、「履修登録する上でシラバスを参考にしましたか」という問いでは「あまり参考にしなかった」「まったく参考にしなかった」が約3割となり前年度同様にシラバスの周知が必要であることが分かる。「オンライン授業は、全般的に満足のいくものでしたか」という問いでは「満足」「やや満足」が約27%、「やや不満」「不満」が約45%とやや高い数値となっている点が明らかになった。また、具体的な改善点としては「フィードバックなどの双方向的なコミュニケーション」が求められていることが分かった。

FDの最後に学部長より、対面からオンラインへと授業の環境が大きく変化しているなか、今まで以上に、双方向のコミュニケーションの必要性が指摘された。

② 次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)

今後の授業方法の改善としては、まずシラバスとシラバス記載の到達目標を明確にし、学生に周知する工夫が求められる。学生にシラバスを読むよう注意喚起する、第一回目の授業でシラバスを配布し到達目標を明確にするなどの工夫が考えられる。

次に、2020年6月実施の「オンライン授業に関する学生アンケート」オンライン授業に関するアンケートからは、満足度の低下の一つの要因として、教員と学生の双方向的なコミュニケーションに課題があることが明らかになった。新しいオンライン授業の環境であり、2019年春のアンケートと単純な比較はできないものの、オンライン授業において、情報提供を明確にすること、より双方向的なコミュニケーションに心がける必要があると考えられる。

人間科学部

結果に関する考察、意見交換の結果

学部全体としては、昨年度と傾向が似ている。時間外の予習・復習の時間が少なく、課題の出し方に工夫が必要である。シラバスに予習・復習について記載されているが、それが十分機能していない。

今年度のデータではオンライン授業の満足度として、満足傾向の学生は30%程度である一方、不満傾向の学生は40%以上であった。この点について検討する必要がある。しかし、これは全学に比べて特別に悪い結果ではない。

春学期当初は1年生の適応を心配していたが、学部学年別の分析結果から、むしろ2年生の満足度が低いことが問題点であることが読み取れた。1年生は、満足度や理解度は(有意差があるか不明ながら)2年生よりも高く、「自分のペースで学習できる」を良い点として評価している者が多かった。一方で「勉強のペースがつかみにくい」を困った点とする者も他学年より多い点の特徴的だった。2年生は、満足度・理解度ともに4学年中で最も低く、「課題が多い」ことを困った点として回答するものが4学年中で最も多かった。

② 次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)

上記を踏まえ、今回提示された資料の内容については、上記①に記載のように、従来から継続している課題を再度検討の上改善していく余地があると思われる。しかし、我々が気付かなかった点(たとえば2年生の満足度上昇のための工夫)や我々が引き続き改善すべき点(たとえば課題提示の工夫)も示唆されている。

オンライン授業に関しては、春学期は教員側も慣れていない点が多かったため、改善・工夫が必要であった面は否めない。しかし、学生側においても同様の要因があったのみならず、個々のモチベーションやライフスタイルなどの個人的な要因もあり、これらも学生の満足度に影響していたと考えられる。オンライン授業の良い点を積極的に活用し、学生のモチベーションと満足度を上昇させるためには、さらに細かな分析と対応策の検討が必要と思われる。学部として、教育研究推進センターと連携・協力しながら、より学習効果の高い授業運営を目指してまいりたい。

情報学部

① 2019年度教育活動の振り返り、アンケートの分析

情報学部では、「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」の集計結果及び「2020 年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の速報データを、各学科において回覧した。それらを踏まえ学科会議等で意見交換・議論したうえで、FD 活動当日は、各学科長からその結果報告を行い、合わせて参加者と意見交換を行った。

以下では、学科ごとに報告された内容の詳細を記すが、以下の①②の項目は、不可分であるため、まとめて示しておきたい。

- ① 2019 年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果
- ② 次期に向けた課題（授業方法の改善、教育課程の改善など）

■ 情報システム学科

情報システム学科では、「2020 年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の速報データに関して、意見交換がなされた。

学科では、2020 年度以前にもオンラインによる授業が実施されている。そこで、過去のオンラインによる授業の試験結果と、2020 年度春学期の試験結果と比較すると、2020 年度の方がよい結果が出るなど、オンライン授業は、学生の学修への支障にはなっていないと考えられる。ただし、試験を受けなかった学生なども微増している傾向もみられ、オンライン授業の状況下で、どのように学修意欲やモチベーションを継続していくか、という点に課題があるのではないかと。

オンライン形式の授業は、難しい点もあると考えられていたが、学生が自らしっかり学修していこう、という空気も併せて作られていたと思われる。これらを踏まえながら、次年度以降も、対面とオンラインを組み合わせて、学部学科としてどういった授業形態が有効であるか、検討して進めていきたい。

■ 情報社会学科

情報社会学科では、「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」の湘南キャンパスと学部別集計結果の比較データを中心に意見が出された。

全体的に回答がポジティブであることは、学科の教員に驚きをもって受け止められているようである。

授業外の学修時間については、情報学部だけではないが、十分に確保されていないことが、アンケート結

果から読み取れる。授業外学修に必要な時間を、しっかり学生に伝えて、学修時間を確保するような指導をする必要があるだろう。ただし、オンライン授業は課題が多すぎることなどが、教育研究推進センターの FD・SD 研修会でも指摘されており、検討は必要であるが、いずれまた対面授業に戻った際には、授業外の学修時間の確保が課題になるだろう。

アンケートでは、「授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと」として「友人との共同学修」を行った学生が 30%程度となっている。しかし、これは、授業中にディスカッションをするということなのか、授業外に共同して学修をしたということなのか、そのどちらなのかによって意味合いも違ってくるはずである。そのあたりがデータからしっかり分かれば、より授業改善につなげていけるのではないかと。

また、「関連の書籍や論文を読む」人の割合は、学部に限らず全体的に著しく低い傾向にあるようだ。一方、「ICT を活用して調べ学修をする」という項目があるが、具体的にはどのような学修行動を指すのか、このアンケートからは読み取れない。学生が手軽にネットで調べることしか行っていないのであれば、それは若干問題であり、書籍や一次資料に当たることの重要性を理解してもらう必要があるだろう。

さらに、「学生が主体的に考えたり、能動的に活動したりする場面を作っている」という設問項目については、情報学部の結果がキャンパス平均に比べて低い傾向にある。調査結果は、学部ごとの集計データではあるが、学科の教育上の特徴として、学生が主体的に考えることや、共同して学ぶことなどを挙げていることから、こうした特徴を学生に評価してもらっていないのではないかと考えられ、改善していく必要があるだろう。

■ メディア表現学科

メディア表現学科では、「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」の結果及び「2020 年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の速報データに関して、意見交換がなされた。

まず、「2019 年度春学期授業改善のためのアンケート」の結果であるが、学修時間や ICT の活用について、情報学部の結果は、他の学部と比較しても、やや高い傾向にある。また、授業評価や学修成果、満足度とい

った点についても、他の学部と比べてもおおむね良好であるように思われる。ただし、授業外学修の時間を見ると、全体的に少ない傾向で、授業以外ではあまり勉強していない姿も浮かび上がってくる。全体的に学修の実態については、情報学部の評価は高いと考えてよいのではないか。

次に、「2020年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の速報データに関してである。まず、ほとんど大学に通学していないと思われる一年生の満足度に着目した。結果は、決して一年生の満足度が低いわけではない。これは、ICTに慣れているのか、あるいは対面授業を知らないためなのかについては検討の余地がある。ただし、ICTをうまく使っていけば、満足度をより高めていくことは、十分できるだろう。

次に、課題が多いという意見があるが、情報学部の問題なのか、どの学科もそうなのかが不明である。情報学部の3学科のなかで、すべての学科で課題が多いということなのか、それとも学科によって偏りがあるのか、そのあたりが結果からは読み取れない。メディア表現学科は、カリキュラム上で、実習を行う科目が多く、ある程度、課題が多いのは仕方がないのではないかと考えている。

情報学部は、カリキュラム内容が学科によってかなり異なっており、学部全体の集計データで、授業改善について論じるのは、難しい学部であるのではないか。

最後に、フィードバックが少ないという学生の声に対して、これはオンライン授業に対する不安のあらわれではないかという意見もあった。

■ 質疑・議論

以上の各学科からの報告の後、質疑応答が行われたが、以下の2点の意見が出された。

- ・課題が多いというが、教員が期待する授業外学修時間と、学生が考える授業外学修時間の相場観が乖離している。教員が、ある授業を理解する上で、必要だと考える時間に対して、学生はそれを「過大評価」している傾向があるのではないか。

- ・授業外学修に関しては、機会があれば、高等学校における勉強の仕方などを調査してほしいと思う。いわゆる受験を経験していない学生を中心に、授業以外の時間をどう使うのかという学修習慣や学びの姿勢が

異なっている。こうした背景を把握する調査も実施してほしい。

文学部

① 2019年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果

「2019年度春学期授業改善のためのアンケート」の結果を、「2020年度春学期“文教大学におけるオンライン授業”に関するアンケート」の結果とも比較しながら意見交換を行った。両年度を比べると、2019年度よりも2020年度の方が授業外学習時間が増えた一方で、授業の満足度は下がっていることが指摘された。アンケートの分析結果は学部の全体的な傾向についてであり、学生が満足するのが全て良い授業というわけでもないが、こうした報告書を見るのは個々の教員の授業の振り返りにも効果的であるとの意見が寄せられた。

今回の研修会はPDCAサイクルのAにあたるので、各自で次のサイクルにつなげられるようなプランを始め、自身の経験に基づく問題点やその改善方法などを考えて、教育研究推進センター主任にメールで送付することとなった。寄せられた意見等は、主任がまとめた上で全員にフィードバックした。

② 次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)

今回は「2019年度春学期授業改善のためのアンケート」をもとに振り返りを行う研修会だったが、2020年度春学期のオンライン授業を経た今となっては、オンライン授業の可能性を考慮せずに授業方法や教育課程を検討することは困難であり、オンライン授業にも関連する問題点や課題が多く挙げられた。

特に、対面授業とオンライン授業の特質の違いを意識して教育課程を編成する必要性や、教材作成や機器使用も含めたオンライン授業のスキルを向上させるための教員研修の必要性が指摘された。そのために、この春の授業については教員のアンケートも実施することや、今後は科目の特性によってオンラインと対面を分け、オンラインで行うものについては、オンライン用機器やソフトの使い方や教材の作り方だけでなく、オンライン授業そのものの内容や進め方についての研修を実施していくことが考えられる。

国際学部

① 2019年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果

これまでの「対面型授業」時の「授業改善のためのアンケート」によれば、国際学部授業のパフォーマンスに関する学部生からの評価は比較的良好と受け止められてきたことから、今回のFD研修では、この評価を「基準線」として、今年度のオンライン授業に関する学生からのアンケート結果を主に研修マテリアルとして活用し、現在展開されている授業に付随する問題点の検証と情報共有を主眼とした。したがって、「2019年度春学期授業改善のためのアンケート」は一参考としての活用とした。

春学期は授業環境の急激な変化に戸惑い、教員サイドも試行錯誤を繰り返したこともあり、オンライン授業における「スペックダウン」の観は否定できず、関連したアンケート結果を見ても、この事実は否定できないことをまず謙虚に受け止めるべきであろう。

オンライン授業に関するアンケートの中で特に不満が強かったのは「課題が多過ぎる」という意見であった。個々の教員が学習目標を達成させるために課題を与えるのは当然のこととはいえ、それらが相乗的に課されることで、結果的にPC画面に向き合う時間が急激に増えた学生たちにストレスフルな状況をもたらしていることが推測される。今後は教員間で「適切な課題の質量」を考慮していくことの必要性が確認された。

秋学期になって一部、対面授業が始まったが、新たな問題も浮上してきている。たとえば、同一授業にも関わらず、対面授業に出席している学生と出席できない学生に対する「教育サービス格差」が激しくなり、遠隔地におり登校できない学生の不満が高まっている事例。教員が十分に授業環境の変化に対応できておらず、自らが提示したシラバスとも齟齬が生じている事例、などがあることが紹介された。

学部長、教務委員長のもとに幾つかの授業に対する改善要請メールも送られている。学生の不満は「授業に改善がみられないこと」というよりは、「教員が改善努力している姿勢、誠意が感じられない」、「真摯に要請に応じてくれない」というところに向けられている

ようだ。個々の教員において授業改善に努力するとともに、必要に応じて、教学責任者から当該教員に注意喚起を行い、一つひとつを具体的に解決していく地道な努力を続ける他は無いが、まずは教員が謙虚な姿勢で学生からの不満に耳を傾け、主体的かつ柔軟に授業の改善を試みるという誠意ある対応が重要であることを確認して欲しい。

② 次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)

主要な意見は上記(1)に列挙したとおりだが、今後、国際学部が東京あだちキャンパスに迎える学生たちは、これまで以上に本学部への期待や学習意欲の高い学生であろうことが予想される。自ずと授業評価に関しての「ハードル」は上昇していくだろう。今年度の授業環境はコロナ禍という突発的、偶発的な要因によって生まれたものだが、今年度行ってきた数多くの「試行錯誤」は、次年度以降の授業コンテキストの在り方、コンテンツの精選、授業手法の改善などの課題にとって、大きなヒントを与えてくれるものでもある。次年度より新カリキュラムが走り出すこともあり、学部としては教務委員会を中心に、新環境により相応しい授業の在り方を模索していく。その前提となるのは「授業の本質はコミュニケーションである」ということであろう。これまでの国際学部授業パフォーマンスへの学生からの好意的評価は、この原則が担保されていたことに拠っていたと思われる。したがって、教員間、教員学生間の良好な「コミュニケーション環境」を授業の中でいっそう貫徹していくことこそが、よりよい授業への α であり ω であることを、最後に確認したい。

健康栄養学部

- ① 2019年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果
- ② 次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)

「2019年度春学期授業改善のためのアンケート」について分析結果を全体に報告し、学部にて特徴的な結果が得られた項目として2点報告した。

Q7「シラバスの到達目標」について「目標がわからない」という回答が多い。

経営学部

Q13「授業の良かった点」及びQ14「改善すべき点」について「ウ.説明のわかりやすさ」でポイントが逆転（改善すべきの方が高い）していた。

学部の授業科目は「座学」「演習」「実験」「実習」と様々であり必修と選択の違いもある。そこで、上記2点（Q7、Q13&14）に関して各教員が自分の当該授業アンケート結果を振り返り、

○シラバスの到達目標の認知度向上について

○授業の説明をわかりやすくすることについて

自身の授業の振り返りと授業内外での取組について報告書を作成・提出し、学部事務室にてファイルしたものを閲覧できる状態にした。

【報告書閲覧の所感】

多くの教員がシラバスについては何かしら授業内で触れていることが見て取れた。しかし、その取組が奏功していないようである。結果のよい教員の回答を見ると、「明確」「平易」「繰り返し」のいずれかが必要と思われる。

わかりやすさの改善に関する各教員の分析は多様であった。自身の授業運営に問題点を見出す回答だけでなく、学生側の問題を指摘する声や学生の要望と授業内容の兼ね合い、マンパワー不足やスキル不足の補完を希望する意見など様々であった。授業形態や必修・選択、人数など環境の違いが大きいことの表れでもあると思われる。

① 2019年度教育活動の振り返り、アンケートの分析結果に関する考察、意見交換の結果

経営学部の特性である実学重視の結果がアンケートの結果や考察にも反映されたものと考えているというコメントがあった。

一方で、指摘事項であった授業外学修時間の短さについては、議論が分かれた。経営学部はグループワークや実施演習が多いため、単に課題や宿題を出せば、学部で要求される学力・スキルを身につけられるわけではないという意見が寄せられている。今後は2021年度のカリキュラム改定に合わせ、適切な授業外学修の在り方を議論する必要がある。

また、各論ではあだちキャンパス移転後の共通教育の在り方に関する議論が行われた。

② 次期に向けた課題（授業方法の改善、教育課程の改善など）

これらに加え、2020年春学期の授業例として以下の3例の報告が行われた。

- ・基礎簿記演習、公会計（石田晴美先生）
- ・スケジューリング（根本俊男先生）
- ・基礎簿記演習（首藤洋志先生）

いずれの授業も、授業動画（板書のカメラ撮影）、自習テスト、質問対応のきめ細やかさなどの工夫があり、非常に参考になるものであった。

2020年度FD・SD研修会（2020年度春学期授業での課題の検討と今後の対応）

授業の運営方法や学生対応等における現状の課題を共有し、本学におけるオンライン授業の今後の有効な活用方法について考えるため、ZOOMによるオンラインでのFD研修会を、2020年10月14日（水）に実施しました。

春学期に行われた授業対応特別委員会アンケートについて、文学部芦田川教授より、春学期授業改善のためのアンケートについて、人間科学部の上ノ原准教授と健康栄養学部太田教授より報告していただきました。

芦田川先生からは、満足度において比較的4年生の評価が高いものの、課題の多さに対する意見が2年生から多いこと、1年生からは勉強のペースがつかめな

いという意見が見られたことが報告されました。また、オンラインによる授業で良かった点として、自分のペースで学修できることや、教員に質問しやすいなどの意見が自由記述に見られた一方で、課題の多さや課題の提示方法が授業によってバラバラであったことや、フィードバックが少ない授業では到達度がわからなかった等の意見が挙げられました。急遽実施されたオンラインでの授業について、受講者・授業担当の双方に負担がかかっている現状ではありますが、授業形態や科目の特性に応じて、オンラインの特性を生かして授業を工夫するなどの対応が必要であるとの報告がなされました。

太田先生からは、授業を受ける上でシラバスを参考

にしたかという問いに対して肯定的な回答の数値が向上したものの、その他の質問項目での肯定的な回答の数値は減少したことが報告されました。特に、オンデマンド形式では、受講生・授業担当者ともに授業時間と自習時間の区別が難しいことが指摘されました。全体の授業の満足度に関しては、昨年度には「満足」「やや満足」の合計で8割を超えていたものが、今回の調査では3割程度まで減少していることが報告されました。

上ノ原先生からは、太田先生の報告を受け、3割程度まで減少した受講生の満足度について、2・3年生の満足度が低い一方で、1年生の満足度がそれほど低くなかったのは比較対象がなかったからであろうとの報告があり、受講生の回答には、フィードバックや情報提供が不十分であったとの指摘が多く見られたことが示されました。自由記述に関して例年は記入が少ないのに対し、今回は6割程度の学生が記入していて、その内容に関するテキストマイニングの結果、課題の多さに関する不満や学費に対する不安のほか、対面での授業実施を希望する記述も多く見られ、また「不満」というキーワードに注目すると、授業内容や課題の量、課題の提出期限、フィードバックに対する意見・要望が多く見られたとの報告がなされました。

引き続き、春学期授業の振り返りとして、オンライン授業における授業の進め方と改善の観点に関して、教育学部桑原専任講師、情報学部大橋専任講師より、授業での取組を取り上げて授業方法や授業で工夫している点を中心に紹介していただきました。

桑原先生は、春学期に行った四つの授業（必修・選択）での、①授業の特徴を考える、②学修ペースを考える、③相互作用を考える、の三視点からの工夫について紹介されました。

具体的には、①授業の見通しを持ちやすくするために各回の目標を明示すること。②学修ペースを考え、資料提供曜日ならびに課題締め切り日時を統一するよう心掛けること。③質問への答えだけでなく、他の受講生の回答も共有すること。ただし、フィードバック

資料の作成には多くの時間がかかったことなどの説明がなされました。

最後に、受講生と授業担当者間で授業について意見交換する機会を持てたらよかったと振り返り、取り組みやすい授業や相互作用の効果的な方法等の課題を指摘されました。

大橋先生は、動画投稿型の授業とそのアンケートを中心に紹介されました。

受講生から好評であった点として、資料をあとから改めて視聴し直すことができる点、動画とそれ以外の資料の両方があった点を挙げ、2年生から4年生では、自分のペースで学修に取り組むことができる点がオンライン授業の良さとして捉えられていると強調されました。

改善点としては、1年生ではオンラインの授業についていけない学生がいたこと、受講生のプリンターの使用（費用・環境）、授業時間の調整、質問しやすい雰囲気づくり、テスト問題の難易度（記述問題の必要性）などを挙げられました。また、対面授業で輝く学生とそうでない学生への対応を今後の課題として挙げるとともに、学修意欲の低い学生のオンライン授業化による影響に関して早急に検証することや、効果的にオンラインと対面を組み合わせることが必要ではないかと指摘されました。

その後、発表を踏まえ、オンライン授業を実施するための効果的な方法等についての意見交換が行われました。

意見交換の様子を一部紹介すると、大橋先生にプログラムなど上手く実行できない学生への対応をどのように行うのかという質問があり、まず完成品を渡してから行うこと、掲示板を使用してのやり取りを行うとの回答がなされました。桑原先生にフィードバック資料の効率的な作成方法についての質問があり、データ集約については試行錯誤中であり、その中の1つの実践として、全員のデータをプリントアウトし、そこに手書きでコメントしてPDFで取り込む実践も行ったとの回答がなされました。